

3章「環境の工夫」に注目～子どもの姿に寄り添って～

3章では、子どもたちの「科学する心」の育ちを支える「環境の工夫」に注目した実践をご紹介します。
「科学する心」を育む園では、保育者が子どもたち一人一人に寄り添い、満足するまで遊ぶための環境や保育者の援助の工夫をしています。その工夫により、子どもたちが対象への興味を広げ、ものの特性や法則を探ったり、事象や生き物の生態への探究を重ねたりしています。

地域の人々との交流や保護者の保育への参画や共有なども含めた、人的環境の工夫は、子どもたちの体験を多様で豊かにし、出合った疑問や失敗を乗り越える姿にもつながっています。さらに、保育の可視化の工夫により、子どもと園と保護者が、相互に保育を共有し、さらに明日への意欲を高めていることが分かります。こうした、子どもの姿を基にした保育の見直しを繰り返していくことを通じた「環境の工夫」により、子どもたちの「科学する心」は生まれ、保育の質の向上に結びついていきます。

興味が深まり、失敗を支える環境の工夫：実践7「ロケットを作って飛ばしたい」

ロケット作りで、自分たちの完成させたいイメージと結びつかないことが、子どもたちのやる気をさらに引き出した。目的が実現できるような環境（材料や素材）の工夫と共に、学級の共有の話題となっていくように、取り組みを模造紙に書き留めることにした（ドキュメンテーション）。また、実際の写真や動画を見たり、本物に触れたりする過程の中で、さらに興味が深まり、子どもたちは、失敗を乗り越え、ロケットを飛ばしたい思いが強くなっていった。



P.26:つばさ保育園

子どもが探究する環境の工夫：実践8「泥団子を作ろう」



例年、泥団子作りの仕上げの砂を保育者が出していた。本年度の子ども遊びの実態を全保育者で話し合うことで、「あえて仕上げの砂を用意しない」環境の工夫をすることにした。子どもたちは、仕上げにいい砂を園内環境の様々な場所で試し、「ここで作ると固くなる」「ここで作ると黒くなる」と、発見する。自分の目指す泥団子になる仕上げの砂を「宝の砂」と呼び、より夢中になって取り組んだ。

P.28:南陽市立赤湯幼稚園

関わることで変化する面白さを追求する：実践9「レインボーかき氷を作りたい」

「お祭りで見たいレインボーかき氷を作りたい」という目的を持った子どもたち、絵の具シロップ何色かを一緒にかけた時、色の変化を発見した。予想に反して色が混ざり合い「あれ？思うようにいかなかったぞ？」と、新たな気づきがあった。保育者は、色が染み込みやすい和紙を新たな材料として提示した。前は気づけなかった混色の法則への気づきやチャート表を作る姿につながった。



P.30:安城市立二本木保育園

子ども同士の共有の場の工夫：実践10「リサイクルペーパーを作りたい」

普段から、「ばらぐみ会議」という、子ども同士、互いの経験や考えを伝え合う学級の場を工夫している。学級で共有し、分からなかったことをみんなで考えたり、新たな興味・関心を得て遊びが広がったりしている。エコリサイクル教室という共通体験やペーパー作りを振り返る中で新たな発想が出てきた。保育者は子どもの考えに寄り添い、友達と考えを伝え合い、興味が共有できるようにしたいと考えた。



P.32:あおい幼稚園

探究を支える環境の工夫：実践11「影って面白い！」



「こんなところに影が！」という発見から、子どもたちの興味が広がり、遊びが発展していった。子どもたちの発見やつぶやき、不思議に感じたことを見逃さず、もっと知りたい・学びたい・やってみようという探究心を深められるような保育者の関わりや環境構成が大切だと考え、子どもたちの考えがすぐ実現できるように、選べるように素材や材料を身近に構成した。

P.34:めずらこども園

* 他の実践に見られる環境の工夫 *

一人一人の取り組みの過程を可視化する

作った船を、子どもが日々作り変えることで進化していく過程を写真に収め、保育室内に掲示しておいた。自分の船の進化の様子を振り返ったり、友達の船に興味をもったりして、さらに意欲を高めたり、探究を深めたりする姿につながった。



(関連事例P.12)

子どもの“ねがい”の違いにより試せる場の工夫

同じ遊びをしていても、一人一人の興味や試したいこと、実現したい“ねがい”は違う。この実態を考慮し、「作った船を浮かべたい」「より速く進むようにしたい」「滑らせたい」それぞれのねがいや試したいことが十分にできるよう2つのプールの場を子どもたちと一緒に作った。



(関連事例P.12)

子どもが“振り返る”場



生き物の成長の様子と子どもたちの声を提示した。いつでも見ることができるようしておくことで、これまでの過程や気づきを振り返ったり、生き物の成長に期待したりする姿につながった。友達と振り返ったり、共有したりする場にもなった。

(関連事例P.16)

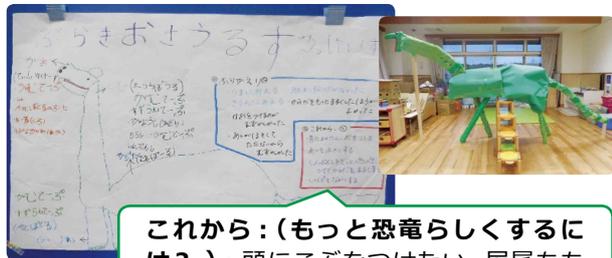
「みんなに知らせたい」共有の工夫



「分かったこと、調べたことをみんなに知らせたい」との子どもたちの思いから、「しんぶん作り」が始まった。他の学級や学年、保護者にも伝わり、対象への興味・関心が広がった。

(関連事例P.32)

子ども同士の話し合いを可視化する



これから：(もっと恐竜らしくするには?)・頭にこぶをつけたい、尻尾ももう少し長くしたい、体にもっと新聞紙を丸めてつけて増やす、足を太くする。

友達と工夫したり、試行錯誤したりして恐竜作りをした5歳児が、活動を振り返った。話し合いの内容を可視化したことで、課題が具体的になり、思い通りにならなかったことを失敗ととらえず、「じゃあこうしよう」と、意欲につながった。

(関連事例P.20)

なぜだろう? もしかして? に寄り添う環境

収穫を過ぎたスナップエンドウなどをそのまましておいた。例年は収穫が終わったら、片付けてしまうが今回は、種が存在に気づいてほしく、あえてそのまましておいた。保育者との対話から、「もしかして、種?」と考えたAさん。「蒔いてみたらいいんじゃない?」と、試すことになった。

夏休みにAさんは、植木鉢に芽が出ていることに気づき「スナップエンドウの種だった! 葉っぱが同じだもの」と喜んだ。



(関連事例P.14)